

菊陽町合併六十周年記念式典式辞

実りの秋を迎えた今日の良き日に、菊陽町合併六十周年記念式典を挙行いたしましたところ、御来賓の皆様におかれましては、公私とも御多用の中、多数御臨席を賜り心より厚くお礼を申し上げます。

御来賓の皆様をお迎えして、町民の皆様と共に盛大に式典を執り行うことができますことは、私のこの上ない喜びとするところであります。

我が菊陽町は、昭和三十年四月一日に菊池郡津田村、原水村及び上益城郡白水村の三村が合併し、菊陽村として誕生しました。合併初代の村長は（故）松岡拓平氏でありました。松岡村長は、合併後の三村の融和と、昭和二十八年の大水害後の農業の復興、そして防災事業に尽力されたものであります。

合併による菊陽村の村名は、「菊池郡の南方に位置し、陽光さんとして輝き、前途の希望は洋々たるものがある」という意味を込め、永遠の発展を願って付けられたものであります。

当時の人口は、一万二千百十五人で田園豊かな純農村でありました。

合併の時から、町民の豊かな生活が出来る都市の実現を目指してきた六十年を振り返ってみますと、高度成長という時代の中で、昭和三十九年の新産業都市という地域指定による工業化の進展、昭和四十年代に入り、村から町への町制施行、九州縦貫自動車道の開通、新熊本空港の開港、熊本都市計画区域への編入、武蔵ヶ丘団地の建設等で町は急激に変貌しました。

これは、二代目村長 斉藤兼亀氏、三代目町長 阪本貢氏の時代の潮流を鋭敏に読み、町民の力を統合して、時代を切り開いていくという卓越した政治・行政手腕の賜物であると、敬い、感謝をしております。

そのような変化の中で、昭和五十年代以降は、農業基盤の整備、教育基盤の整備、道路整備、土地区画整理事業、下水道整備等、町民の豊かな生活を実現するための基盤整備に黙々と取り組んでまいりました。その結果が、

平成の時代になり、公共下水道普及率九十九・七パーセント、菊陽バイパス全線開通、大型住宅団地の開発、セミコンテクノパーク・原水工業団地等への超優良企業の進出、大型商業施設の立地等々の成果となって表れているのであります。

そして、このような都市的な発展だけではなく、町の基幹産業としての農業も隆盛を極めており、白水台地を初めとして、町内各地に、米・野菜・果樹そして畜産と、足腰の強い農業が根付いているところであります。

皆様方、御承知のとおり、菊陽人参は、西日本において中心的な地位を占めるほどの産地形成をしております。

この様な活力のある菊陽町を、先頭に立って創り出されたのは、本日、感謝の意を込めた表彰をお受けいただいた富永清次前町長であります。

松岡村長、斉藤村長、阪本町長、富永町長、この四人の先輩の知恵と志とリーダーシップが今日の菊陽町を創ったのであります。

この様な先人たちと同様に、町と一緒にあって現在の菊陽町を創り上げた町議会議員の方々の功績も忘れてはなりません。町議会議員の方々は、時に役場職員と一体となって、国・県・町の事業を推進してこられたものであります。

そして、今、私が菊陽町の隆盛の原動力となったものとして、尊敬と感謝の念を抱いているのは、町民の方、お一人、お一人であります。その、お一人お一人のたゆまぬ努力であります。

この様な先人の知恵と志、そして町民の方々のたゆまぬ努力が、昭和三十年の合併以来、永々と続き、確実に、確実に積み重ねられて、今の菊陽町があると私は考えております。

おかげで菊陽町は、町民所得、人口増加率、平均寿命など人々の健康で豊かな生活を表す数値は全国に誇れるような数値を示し、他の地域から人の流入が続いています。合併後の人口が一万二千百十五人であったものが、現在では四万四百人に増加するという勢いのある状態が続いています。

私達は、この勢いが持続するように、全力を傾けなければならないと考えております。

先人の知恵と志を忘れずに、町民の皆様と一緒にあって、輝かしい生活都市・菊陽を創り出すよう、新たな第一歩踏み出そうと、今日、決意を新たにしているところであります。

何卒、引き続き御臨席の皆様の御協力と御支援を、宜しくお願い申し上げます。

結びに、菊陽町合併六十周年記念式典に当たり、今後の菊陽町が陽光さんとして輝き、前途の希望は洋々となるよう、併せて、御臨席の皆様の御健勝、御多幸を御祈念申し上げ、私の式辞といたします。

平成二十七年十月十八日
菊陽町長 後 藤 三 雄